

秋届く、

秋届く、

れら

『だいたいようぶ、ぼくはずっとここで待ってるから』

自分のことを「ぼく」と呼ぶ女の子。栗毛色でふわふわした長い髪。顔はよく見えないけれど、彼女は淋しそうに微笑んでいる気がする。甘い匂いに包まれた世界は、全てがぼんやりしている。

俺は彼女に何か言っただけなのに言葉にできなくて、伸ばした手が届かないままに、彼女が遠ざかっていく。

「おいつ、」

雲の上を歩いているようだった意識が、急激に重さをもった。唸りながら薄く目を開けると、呆れたように俺を見下ろしている友人の顔が見えた。

「起きろよ、いい加減。もう授業終わってんだぜ」

それでも、うだうだと机に齧りついていている俺。勢いよくプールで泳ぎまわった後のような気だるさが、俺を掴んで離さない。

「マジで、委員会遅れんぞ」

「ん、あー」

溜息をつきながらも、俺が起きるのを待っていてくれるような友人。その目のせいで、きつそうな奴だ

って思われがちだが、本人は至ってゆったりとしたマイペースな奴だ。今だって遅れると言いながら俺をおいていくこともない。たぶん、急がせているように言いつつも、まあいいかとくらいにしか思っていないのだろう。

こんないい加減な感じの奴が委員長なんだと言ったら、いったい何人の奴らが驚くんだろうか。でも、本人があまり自覚がないだけで、意外と人望があるのも事実だ。そのせいで、長とつく仕事を任されることが多い。こいつも特に断らないから。

今では「長」の読み方を変えた「オサ」って呼ばれていたりする。委員長やら部長やら会長やら、「長」の上が変わっても「長」であることには変わらないかららしい。他の奴らは、こいつのいい加減さを知っているのか、いないのか。まっ、こんな風になんかごたごた言っている俺だって副委員長なんかだったりするんだけどな。

「ふあ」

「なんだよ、あんなだけ寝たのに寝足りないのか」

オサは、俺の欠伸を目撃して見つけて言った。

寝足りない、確かにそんな感じだ。最近、寝るたびに夢を見るせいで眠った気がしないのだ。

「最近、授業のほとんど寝てるみたいだし、大丈夫なのか」

あーとか、うーとか唸っていた俺を心配してみたんだ。

秋届く、

たかだか授業中の睡眠時間が増えたくらいで、つて思ったりもするが、俺は敢えて言ったりはしない。確か、オサには三歳くらい下に身体の弱いソラつて名前の弟がいるらしい。だからなのか彼は見た目よりもずっと他人の体調に敏感らしい。

「なんかさ、夢見が悪いんだよな」

居眠りの原因、それはあの夢のせいだと思う。

「ゆめ——、」

それまで、心配そうな言葉は掛けても前を向いたままだった彼のつり眼が俺の顔を映した。

「そう、夢っ」

いつからか、同じ夢を見るようになった。

赤や黄色に色踊る落ち葉の中で、駆け廻り寝ころび遊び回っている。俺はまだ小さなガキで、前を駆ける自分と同じように小さな背中を追いかける。ふわふわした栗毛色の長い髪が、彼女の動きに合わせて楽しそうに飛び跳ねる。

「ぼくはずっとここで待ってるから」

自分のことをぼくという女の子。俺のことをずっと待っている。あの子は誰で、どこで待っているんだ——。

女の子の顔をよく見ようとしても、ぼんやりとしか見えぬ。俺に見える全てのものが、薬缶から出てくる水蒸気を通して見えるかのように揺らいでいる。その曖昧な

世界の中で、はつきりと俺に存在を主張しているのは鼻に残るふんわりと甘い匂い。

俺にはその匂いがあの女の子であるように思えた。

「どんななんだ、」

委員会の長と副、それに生徒会が集まるかなり大規模な中央会議。中高一貫教育の学校であるため、生徒会長と副会長以外は全員が高等教育の二年で構成される。だが、今はもう紅葉や銀杏が主役の季節。生徒会の後任も決まり、今日の会議は後任への実質的な引き継ぎの場のようなものである。

ぞろぞろと役員たちが集まり広い教室が黒い人で埋まっていって行く。そんなざわめきの中で、それほど大きくもない声が届いた。

「どんなって、何が」

聞こえなくとも聞こえてくる喧騒に耳を傾けていた俺は、彼の顔を見ずに聞き返した。

「お前の夢が」

この会議室に来るまで、夢の話は終わったと思っていた。居眠りの原因が夢だと聞いた後、オサは今までずっと難しい顔をして黙っていたから。

そんな表情をしたまま、俺に聞いてくる。

「あ——」

俺は何とも間拔けな顔をして、彼に顔を向けてしまっ

秋届く、

たんじやないだろうか。

たぶんしていたんだと思う。あれだけ変な声が出たのだから。でも目の前にいる奴は、眉一つ動かさないから、バツが悪くなってきた。

「小さい女の子が出てくるんだよ」

俺はオサの反応に戸惑いながらも、話し出した。

話してて気がついたけれど、高二の男が幼稚園生くらいの女の子の夢で眠れないって、かなり危なくないか。

それが気のせいじゃないってことは、話を聞いたオサが真剣な顔して黙ったことが証明しているんじゃないか。いや、そんなこと思うような奴では——。

「なあ、夢って深層心理が表れたものだっていうけど、」
「……はあ。なんだよ、それ。俺が」

深層心理ってまるで俺が、小さい女の子と遊びたいとでも言うのかよ。お前本当に俺をそんな奴だと思ってるのかよ。

俺は言いたいことがありすぎて、ありすぎたせいで何にも言えなかった。いや、反論とか主張とかする前にオサが俺の言葉を遮ったのだ。

「逢いたいんじゃないか、」

「アイタイ——。誰に」

「その女の子にだろ」

「は、」

名前も知らないのに、どこにいるのかも、生きている

のかも。そうだ、俺はあの女の子が生きているのかだつてよくわかっていないのに。それなのにどうして会いたいなんて。知らない女の子だぞ。

知らない——。夢に出てくるのに、何で俺の知らない女の子なんだ。本当に、まったく、知らないのか。どうして。

「まっ、あくまで一観点からの意見だけだな」

別に気にするほどのことじゃないな、と続いた言葉。

考えていることを読んだような科白にまるでからかわれたみたいで、むっとした。

「なんだよ、人が眠れないって悩んでんのにさ」

他人事だと思つて、と付け加えながら俺は机に伏せた。目は人で埋まっていって教室を捉えながら。

「まあ、確かに他人事だけど、僕だって同じようなもんだぜ」

オサの言葉に思いのほか驚いて、教室に向けていた視線を奴の顔へと向けてしまったくらいだ。まあ、意味が理解できなかったせいもあるけど。

俺が何も言わないでいると、衝撃的な言葉を吐いた自覚がないのか平然としたまま話を続けた。

「夢を見たんだ。いや、夢みたいな出来事だったっていう方が正しいかもしれない」

「会いたい人が出てきたのか」

「ああ。僕の場合はリュウグウノツカイだけだな」

リュウグウノツカイって……。それは会いたい人なのか。会いたい会いたくない以前に、人なんだろうか。

しかし、俺の動揺なぞ彼には関係ない。彼は会いたい人と会ったことを思い出したのか、俺が初めて見るような顔をしていた。いつものつり眼が垂れ下がることはいけれど、そう思わせるくらい優しそうな顔をした。

彼のそんな表情もまた俺を驚かせた。

「なん、なんだよ、リュウグウノツカイって」

浦島太郎を竜宮城に連れて行ったカメか何かなのかよ。「まっ、それは――」

「あー、あー、それではこれから中央委員会会議を始めたいと思います」

大事なことが語られる直前に、ちょうど会議の開始を知らせる声がかかった。

「気になるなら、オカリナでも吹くといいかもしれないな」

会話が中断された時に、彼は意味深な言葉を残した。その一言のせいで俺は会議に集中できなかった。

オカリナって、あのアニメの楽器かとか、月夜の晩に吹くものかとか。でもかなり気になってはいたけれど、終わってから聞けばいいと思った。だから、その時にはそれ以上つつこんで聞かなかった。というよりも、会議中に奴に話しかけるなんてできなかつたせいもある。

だが結局、会議が終わっても俺は何も聞くことができなかった。

会議が終わる前に、携帯に電話が掛ってきた。

さすがにマナーモードにはしていたけど、あまりにもしつこく続いたからオサに黙示して、そっと会議を抜け出した。

「もしもし」

無機質な小さい機器から、切羽詰まったような低い声が響いてきた。

掛けてきたのは父親だった。母親が掛けてくることはたまにあるけど、父が俺の携帯に掛けてくるなんて珍しいことだった。いや、父親との関係が疎遠だとかそんなんではない。ただ単に緊急な用事がなければ電話なんて使わないからだ。実際、俺だってどうしてもということがないと、電話どころかメールさえしないのだから。

そんな父親の切羽詰った感じの電話だったから、俺は慌てた。

「なんかあったのか、非常事態か」

「いや、非常事態――かどうかはわからないが、今すぐ帰ってきなさい」

なんだよ、それ、とか色々聞きたいこともあったけど、父親の珍しい行動だったこともあり、すぐに下校することにした。

秋届く、

あー、会議とオサどうしよう、と思わないでもなかった。でも、とりあえず彼の机の上に帰ると書いたメモを残してきたから大丈夫だろう。

車窓から見える風景が、味気ないビル群から家並に変わり、今は季節を彩る木々ばかりになっていた。

つい一時間くらい前には、あんなに騒がしくて無機質なところにいたのに。まるでそれが夢だったかのよう思えてくる。

帰宅してきた俺を待っていたのは「今から、おじいさんの家に行くぞ」というあまりにも予想外な一言だった。父は俺の意見を聞く気はないのか、制服から着替える時間も与えられずに車に乗せられた。

父のいう「おじいさん」は、俺の父方の祖父のことだ。早くにおばあさんを亡くして、男手一つで父と叔父さんを育てた俺の父だ。俺はその「おじいさん」のことをじじちゃんと呼んでいた。

じじちゃんの家は俺の住んでいるところから、車で三時間くらいのところにある。そのせいか長期休みの時くらいしか行ったことがない。でも行けばじじちゃんが本を読んでもくれたり、じじちゃんの家の裏山に連れて行ってくれた。幼い時の記憶のせいか、不鮮明なものが多いが、楽しかったことはよく覚えている。

そんなじじちゃんは俺が小学生の時に亡くなった。それから、じじちゃんの家には一度も行ったことがない。それは、父も同じはずだ。なのにどうして今さらになつて急に行くことになったんだろう。

「なあ、父さ、」
「おまえは、おじいさんの家に秘密があるのを知っているか」

俺が声をかける前に、父から言われたのは耳を疑うような科白だった。

呆気にとられて何も言えないでいる俺に目も向けずに父は続けた。

「おじいさんが亡くなったとき、お前はまだ小学生になつたくらいだったから覚えてないかもしれんが、」

それからじじちゃんの家に着くまでの間に、遺言のことを聞いた。

それは、自分が死んでから、十年間は家や土地を売つたりしないようにというものだった。そして、十年経つた時に自分の親族の中にそのまま維持しようという者がいたら、その人に全て譲るようというものだったのだ。つまり、父さんたちは、じじちゃんがそうまでして遺しておきたいと願ったものなんだから、秘密があるのだからと考えたらしい。でも、父さんも叔父さんも特に気合を入れて探す気まではなかったようだ。それでも、自

秋届く、

分たちの父親の遺言だからと年に数度かこの家の修繕に来ていたそうだ。

そして、今年が約束の年。叔父さんは仕事が入ってしまつたらしく来れなかったが、実は二人とも十年目の今日何かが起こるかもしれないと内心わくわくしているようだった。

最初は真面目に話を聞いていた俺も、だんだんと父さんが単に楽しんでるだけだとわかって肩の力を抜いた。いつもと違った父さんを見て、俺は意外にもかなり緊張していたみたいだ。この時になるまで気がつかなかったけど。

それにしても、俺はじじちゃんの遺言が理解できなかった。普通「遺言」と言ったら、子供に遺産を遺してあとは喧嘩しないように分けなさい、とかいうものだと思っていたから。

だいぶ長い間、赤と黄と茶の景色が続いていた。漸く開けたと思ったら、薄ぼんやりとした青灰色の家が見えた。少し洋よりな和洋折衷な感じ。俺の記憶ではもっと大きなイメージだったけど、それほどじゃない。

「久々だし、空気の入替えをしないとな」

おまえは自由に探索していい、と言って家の中に入っていた。もちろん、父さんは秘密が見つかったら教えるとは言わなかったけれど、目は教えると言っていた。

た気がする。俺の勘違いじゃなければ。

俺は特に父さんの意見を無視する必要もなく、むしろありがたく受け取り、独り家の周りをぶらつくことにした。

じじちゃんの庭はけっこう広いようだ。古い記憶のせいでほとんど庭に関する記憶はなかった。主を失ったというのにそこは意外と整っていた。コスモスや山茶花、ススキ、その他にも名前のわからない赤い実などが懸命に命を咲かせている。道端で花を見ても別に心動かされることなんてないのに、今はどことなく触れてみたくなる。

そろそろと庭の中に踏み込んでいく。

ふと、気がつくとふわりと甘い匂いがしてきた。

あまりにも夢中に、いや心此処に非ずという感じで歩いていったせいか、辺りを見渡しても家が見えてこない。

じじちゃんの家を回るように歩いてはたはたから、今はたぶん裏庭にいると思う。

昔嗅いだ事があるような懐かしい甘さ。確かこの匂いは――。

『きんもくせいって、ぼくの大好きな匂いなんだ』

そうだ、昔誰かが俺に言ったんだ。金木犀の匂いが大好きだと。でも、それは誰の言葉――。

「金木犀の香りは、人を誘うんですね」

急に聞こえてきた声。自分の思考を読み取られたかの

秋届く、

ような科白。

声の主は、甘い匂いのような姿をしていた。赤や黄に彩られた世界の中で、一際はつきりとその形を浮かび上がらせている。真っ白で雪のようなブレザーと半ズボンに包まれた身体。記憶の中の女の子と重なるような栗毛色で短い髪は、服と同色の帽子で隠されていた。

突然現れた子供を俺はまじまじと見ていた。

そんな俺に構うことなく、その子にはにっこりと笑った。

「あなたが逢いたかった方からです」

いきなり現れたその子は何の脈絡もなく、俺に白い封筒を差し出した。

誰から、いや俺の会いたかった人って言ったよな。アイトイ、俺は誰に会いたいんだ。こいつは何を言ってるんだ。

「ボクは、届け人。届かない想いを繋ぐ者」

大人びた微笑みを浮かべた少年は、どうぞと俺の手に封筒を握らせた。

少年を映したように真っ白な封筒からは、仄かに金木犀が匂った。懐かしい気持と、もどかしい気持が混在しているようだった。

中には橙色の小さな花と赤や黄の落ち葉が入っていた。

『だいじょうぶ、ぼくはずっとここで待ってるから』

俺の耳に響いてきたのは、夢の中の、いや昔俺が一緒に遊んだ女の子の言葉だった。

じじちゃんが亡くなった年の秋。俺は小学生とは思えない行動力で一人この場所に来ていた。

今まで忘れていたけど、俺はたった一人でこの場所にいた。いや、正確に言うなら一人で来てあの女の子と一緒に遊んだんだ。あの時、夢を見たんだ。さびしいと泣いて、誰かが俺を呼んでいる夢を。それがどうしてこの場所に結び付いたのかは思い出せないけど、俺は今と同じように夢に導かれた。

そう、じじちゃんの裏庭をずっと行ったところに大きな大きな金木犀の木がある。そして、その下には女の子が座っていたんだ。

そこで俺は一緒に駆け回ったり寝転んだりして遊んだ。

俺に手紙を届けた少年のことなんて、すでに頭から消えていた。それよりも、漸く思い出せた人の子とで、夢に現れた女の子のことで頭がいっぱいになっていたから。

温かな色に染められた木々の合間を突き進んでいく。だんだん金木犀の匂いが強くなっていった。

濃い緑の葉を覆い隠すように橙色の小さな花々が木を包み込んでいる。

「やっとな来てくれたね」

濃い匂いととも俺に降ってきたのは、あの時と変わらない女の子の笑顔。俺は彼女より遥かに大きくなって

秋届く、

しまったけれど。

「待たせて、ごめんね」

「いいよ、だってぼく言ったでしょ。ずっとここで待ってるって」

にかっと思った顔が、金木犀の花のようだと思った。

じじちゃんの守りたかった秘密は案外この少女の笑顔と金木犀なのかもしれない。

それなら、俺も守りたいと思う。漸く俺に届いた小さな小さな金木犀を。